

春の北上

オホーツ海沿岸に流水が接岸した二月初め、寒風吹き荒ぶ紋別空港に沖縄から来た流水ツアーの観光客が降り立った。その一人が切符をポケットから取りだした途端に、ピンクの花ビラがヒラリと雪の上に舞い落ちた。流水の世界とは対照的に、沖縄では南国らしい華やかな緋寒桜（ヒカンザクラ）が満開の季節だった。真冬から晩春にかけてが、日本列島の長さを最も感じる季節となる。

ヒカンザクラの北上から始まる桜前線も、本州ではソメイヨシノザクラにリレーされ、平均気温二度の春の波とともに北上、津軽海峡を渡って札幌付近からはエゾヤマザクラの桜前線に姿を変え、終着駅は日本列島の最も東に位置する根室となる。宮古島の二月二〇日で始まった桜の旅は、五月五日の可憐なチシマザクラの開花となつて4カ月の長旅を終える。つぎ次ぎと繰りだされる季節の模様は、蠕動せんとく運動のごとく、一歩後退二歩前進し、歩く速さで日本列島を進む。春の北上を「現代俳句の面白さ」飯田龍太著、新潮社）の春の秀作俳句で結んでみた。

早春は枯れ野からの芽吹きで始まる。桜前線に先立つこと一ヶ月、冬枯れから植物が活動を始める目安となる平均気温五℃の早春前線が北上し始める。土の中の虫が蠢めきたす二十四節気の啓蟄が三月六日、この暦、もともと中国大陸の華北の黄河流域の暦で、西日本からみても二月ほど早い季節感となる。

青き踏み靴は何色夢の中 萩野さち
若草に燃える野に鮮やかな色の靴が踊り、待ちに待った春が躍動している。その早春の春告げ花はフクジュヨウで始まり、黄色の花を満艦飾に付け

るマンサクが咲く。タンポポや菜の花に続く春の色は黄色が圧倒的に多い。虹の7色で見られるように太陽の光は赤から紫まで光の色が混ざって白くなっている。その光のスペクトルの中で黄色が最もエネルギーが高く、冬枯れから初めて顔をだして咲く花が、最も強い光の黄色を目一杯に受ける色しているのも自然の摂理だろう。人の目も黄色を最もよく捕えられるようにできており、より強烈な印象となっている。

気象台や測候所での生物季節観測によれば、タンポポの開花前線は2月半ば頃に九州南部を出発した三月一六日に奈良を通りすぎる。二日の深夜、奈良東大寺二月堂で「お水取り」の神事がとり行なわれる。大松明の火の子を受ければ無病息災間違いないの「利益、みやく」がある。お水取りが終われば西日本では厳しい冬が打ち止めとなつて春を迎える。

一月堂から鴟尾（ひび）が見え 春
が見え 立川昌子

日本列島、春の模様も進んでは退き、退きては進む。三月の彼岸の頃ともなれば、春の淡雪の季節となる。淡雪も過ぎれば、江戸時代の桜田門外の変を影で演出した春の大雪ともなる。一九八六年の彼岸の大雪では湿った雪が関東平野南部で三十センチも積り、時ならぬ暴風雪となった。霰（あられ）の湿った雪が送電線に吹きつけて、シャベット状にぐると巻きつき直径10センチほどの雪の筒となつてしまった。計算では送電線の一本あたりに二下ントラックがぶら下がった勘定となり、神奈川県厚木付近で送電鉄塔がグニヤリと次々と倒壊した。雪に弱い首都圏大混乱、空前の130万世帯停電」とのヘッドラインが踊った。これほどでもないが、彼岸のお墓参りの時の雪に

は大弱り。

骨納む名残りの雪の降るわ降るわ

清水基吉

春も三月から四月にかけて気象の記事を見ると意外に雷の記事が多い。冬眠の蝮のほかに寝息なし

金子兜太

冬の眠りを覚ます春雷は、

島を覆う蝮起しの怒涛音

須並 衛

となつて土の中まで響きわたる。土の中の蝮まむしだけでなく、堕眠をむさもつていた虫どもに痛烈な目覚ましとなつただろう。春のグズつき模様の菜種梅雨、梅雨明けを想わせる春雷で吹き払うこともある。下界は春の季節が進んで、生暖かい気流が南海上から流れ込んでくると、上空の冬の名残りの寒冷渦との間で火花が散る。大気がタルマさんを逆立ちしたような不安定となり、元に戻ろうとして入道雲ができて激しい雷雨となる。クワバラクワバラと、かの菅原道真卿の願いすれば、

春雷は空にあそびて地に降りず

福田甲子雄

程度で納めて貰えそうである。

山を眺めれば、淡い赤紫や薄茶色に覆われた木々の芽吹きが躍動して「山笑い」となっている。秋の「山粧（まきお）う」、冬「山眠る」に続く、春山は淡谷（たんや）にして笑うがごとし」からきている。春の日の日本列島を俳句の季語で綴ると、北国ではまだ「山眠り」、東日本では「山笑い」、西日本では甘露の雨が降つて「風光り」、南国沖縄ではすでに「風薫る」季節となつている。長い日本列島を春がゆつくり歩いて北上している。